

## Support for Woman Doctors ～私からあなたへ～ 「とんだ場所で 20 年」

進藤久美子先生【山梨県 23期】  
勤務先: 公財 身延山病院  
お子さん: 18 歳 17 歳



### <まずは自己紹介>

こんにちは。山梨県出身 23 期の進藤(旧姓大原)です。「もし入学後に北海道の人を好きになってしまったらどうしますか?」という学生には超難問をぶつけてくる自治医大の面接をなんとかパスし、1994 年に自治医大に入学しました。入学後は県庁の方が心配するような大恋愛をすることもなく、無事(?)同期で入学した山梨県人会の相棒と結婚。こちらの方がむしろレアな気もしますが…。そして現在 2 人の息子の母をやっています。

### <いざ地域へ>

2 年間の初期研修後 3 年目で静岡県境近くの診療所に派遣されました。ここがまたすごいところで…。朝起きてカーテンをあけると庭を猪が走り抜けます。往診に向かう道では両脇にかぼちゃを抱えたサルに出会い、患者さんの家の縁側には曾孫が猿と一緒に昼寝していました。帰宅すると 5 寸ムカデや私にはタランチュラにしか見えない大きなクモが一斉に動き始めます。夫は病院勤務で夜遅いため私が殺るしかありません。これが一番きつかったかもしれません。一方仕事はとても刺激的でした。派遣されたのは無床診療所で、できる検査はレントゲン、心電図、エコー、胃カメラのみ。レントゲンも当然 CR ではありません。管電圧、管電流を自分で設定します。真っ黒かったり、真っ白だったり何枚変な写真を撮ったことか。写真は読むものである前に撮るものだと思い知らされました。患者層も様々です。当時町内に医療機関が 1 つだったのと歴代の先生方の頑張りのおかげで毎日大盛況でした。私は研修医時代内科全般、小児科、整形外科、麻酔科、救急を勉強したのですが 3 年目の経験など推して知るべしです。「なんとなく調子がでない」と歩いてきた

人が普通に心筋梗塞だったり、「ごめんちょっと足切っちゃったからみてくれる?」と飛び込んできたお兄さんの下腿はチェーンソーでざっくり切れていました。他にも耳の中に BB 弾を入れて取れなくなった子どもとかズボンのファスナーに大事なところを挟み込み大泣きしながら運び込まれる男児など教科書に載っていないことも沢山おこります。自分の勉強不足を棚に上げ、専門の病院を受診してほしいとお願いしても「とにかく先生のできる範囲でいいからさ、やってみてよ。それでダメなら仕方ないじゃん」という調子です。私は迷惑を承知で大きな病院に電話して電話越しに指示を仰ぐなんて事も度々でした。それでも患者さんは「ありがとう。もうこれで次はぼっちだね」と帰っていきます。へこむことも多々ありましたが毎日無我夢中でとても楽しい日々でした。赴任前の思いとは裏腹に、ある意味ここは症例の宝庫だったのです。そしてこの人達のためにもっと勉強して少しでも恩返しをしたいと思いますようになりました。結局私を育ててくれたのはこの地域の人達だったのです。その後診療所赴任中に息子を授かり異動にはなりましたが今も変わらず同じ地域の病院で働き続けています。小学生の頃によく診ていた女の子がお母さんになって内科を受診するなど時代の流れを感じています。

### <一生楽しく仕事をしよう>

私が常に心懸けているのは感謝の気持ちを忘れないということです。仕事はさせてもらっていると思うこと。できる仕事は自分から貰いに行く。権利を否定するつもりはありませんが、同じ事をするにも権利の行使ではなくありがたくさせてもらった方がお互い気持ちよくありませんか?これは子育てをしながら働くうえでとても大切なことだと思っています。

後輩へのメッセージ:  
「置かれた場所で咲きなさい」

「自治医大卒業生 女性医師支援 NEWS」では、読者の皆様からのご意見をお待ちいたしております。特集記事のテーマ、絵本やその他のコーナーについても、ご希望などあれば、是非お寄せください。  
連絡先: 自治医科大学 地域医療推進課 卒後指導係 E-mail: [chisui@jichi.ac.jp](mailto:chisui@jichi.ac.jp)